

平成24年2月23日

生駒市議会議長 井上充生様

市民福祉委員会委員長 伊木まり子

委員会調査報告書

当委員会で調査した事件の調査結果について、生駒市議会会議規則第107条の規定により、下記のとおり報告します。

記

- 1 派遣期間 (1) 平成24年1月24日(火)
(2) 平成24年1月25日(水)
- 2 派遣場所 (1) 大阪市福島区野田周辺
(2) 市内宝山寺参道周辺
- 3 事 件 観光政策の在り方について
- 4 派遣委員 伊木まり子 吉波伸治 樋口清士 塩見牧子 竹内ひろみ
西山洋竜
- 5 概 要 別紙のとおり

別紙

視察先	大阪市福島区野田周辺（「OSAKA 旅めがね」の野田エリア）
施策等の名称	まち歩き観光現地調査
視察の目的	まち歩き観光に取り組む事例、「OSAKA 旅めがね」（野田エリア）の実状を知り、生駒市における観光施策にどうつなげるか考察する。
視察の概要	平成 24 年 1 月 24 日、13 時に近鉄生駒駅に集合。鉄道にて JR 野田駅へ。「OSAKA 旅めがね」エリアコーディネーター西江幸久氏の案内で野田駅周辺を歩く。明治・大正・昭和の長屋の残る路地や路地に点在するお地藏さん、地元のお菓子や駄菓子屋、八百屋などに立ち寄った。古くからある民家を利用した高齢者サロン「ななとこ庵」で西江氏より大阪市において市民協働による着地型観光プログラムが立ちあがった経緯など説明を受けた。17 時、JR 野田駅にて西江氏による案内終了。鉄道にて生駒に到着。視察を終えた。
考察	<p>委員 A</p> <p>○住民、来訪者（仕事や遊び目的で地区内に来訪する概ね 20～40 代の比較的若年層）を対象にワークショップ（WS）を実施、まちの魅力資源を把握、共有化をはかったのち、双方の協働によるまちづくりの検討、まちづくり組織の結成へと進展しているが、WS の企画や住民と来訪者をつなぐコーディネーターが不可欠。地域の中でコーディネーターをどのように確保するかが課題。</p> <p>○「まち歩き観光」には市民サポーター（まちあるきガイド）の発掘も必要。この場合のガイドは、寺社仏閣などの典型的な観光資源を廻るものではないため歴史等の知識を披歴する歴史ボランティアガイド的なものではなく、そのまちが好きで、プロ意識で客をもてなしたいという多世代からなるエリアクルー。</p> <p>○しかし、まち歩き観光資源のコンテンツのベースは従来通り「歴史」。刃物研ぎ、クリーニング屋、駄菓子屋など、今ではあまり見かけなくなった店が残っていることも懐古の情を惹き起し、観光資源となっている。</p> <p>委員 B</p> <p>○学ぶべき点</p> <p>①地域の魅力要素をきめ細かく最大限に再発見している。</p>

- ②地元の人々の十分な理解・協力・ささえを得ている。
- ③「ななとこまんじゅう」など地元の魅力づくりの努力が感じられる。
- ④「古きよきもの」を生かすことで守ろうという努力が感じられる。
- ⑤以前であればなんでもなかったもの（長屋・路地・お地蔵さん）を地域資源にする（価値を吹き込む）ことで地域全体の魅力度を高め、野田エリアを住みたい街・行きたい街に一定変えることに成功している。

委員C

- エリアコーディネータによるコースづくりは、地域の歴史、文化、人材を始めとする資源を生活者目線で詳細に発掘し、地域を紹介しつくすといった姿勢で行われている。このことにより表層的でなく、本物の地域を紹介することが可能となり、来訪者を飽きさせないコースづくりを可能としている。
- エリアクルーの役割は、単に地域の歴史等を紹介することだけに止まらず、地域の人と来訪者とを繋ぎ、地域と来訪者とのコミュニケーションを発生させる触媒となることが求められている。このコミュニケーションによって来訪者は目に見えない地域の資源を感じ、満足感を得ることとなる。
- また、エリアクルーは来訪者をいかに満足させられるかの資質を審査された人達で占められており、地域を紹介出来れば良しとする一般的なボランティアガイドと異なる人材となっている。（ボランティアガイドの中には自分の知識を伝え過ぎて自己満足に陥っていくケースもある。）
- 生活環境と観光という相容れないものを、地域とのコミュニケーションで乗り切っており、また、商業・飲食施設等についてはウイン・ウインの関係を構築することにより、地域に受け入れられる、地域と共存できる観光商品として成立させている。
- また、「OSAKA旅めがね」は、未だ採算は取れていないものの事業性を求めた取り組みであり、継続的な取り組みにするためには大切な視点となる。
- 着地型観光、まち歩き観光を考える際に、「OSAKA旅めがね」に

見るコース設定の考え方、地域との関わり方、ガイドの役割等は非常に参考になる。特に、ボランティアガイドの育成・活用に取り組み始めた生駒市においては、今後、観光のあり方、観光商品の開発方針を明確にした上で、人材育成等の考え方を再考することが求められる。

委員D

- この町は戦火を免れたため、明治の頃からの古い町並みそのまま残っている。長屋住まいの労働者のまちは、バブル期の再開発にもなじまないため、開発を免れ、小さな商店もそのまま残っている珍しいまちである。かつての日本社会では一般的であったコミュニティーが健在で、住民同士が顔の見えるまちに出会えた思いがした。天井からぶら下げた釣り銭入れのある八百屋さん、看板も何もない隠れ駄菓子屋さん、何でも修理する研ぎ屋さんなど、いまでは文化遺産ともいえるような店が営業していることにまず驚く。
- 自ら「長屋が好き」といって長屋に住み、まちの隅々まで知り尽くし、観光コーディネーターとして活動している青年の存在は大きい。彼にかかれば、まち中のどんな小さな物も観光の対象になる。たとえば、植木鉢屋さんの跡地に敷かれた煉瓦に刻印された岸和田のメーカーの紋は値打ちがあるといわれ、皆で目を皿にして探してやっと見つけ大喜び。また、まちの辻辻にあるお地藏さんは地域の人たちによってきれいに清掃されているが、七つ以上お参りすると願いが叶うといわれ、結構夢中になって訪ね歩くことになる。隠れ駄菓子屋さんでは、なんでもないガラス戸を開けて一歩中に入ると、なつかしい小さなお菓子などが並び、その奥ではお好み焼きも食べられるようになっていて、しばし遊ぶことができる。
- 野田のまちは、生駒市ではすでに失われて久しいものを数多くもっており、生駒市の観光にそのまま生かせるものは少ないが、生駒にも様々な歴史・文化・自然・地場産業などの宝物がある。それらを改めて見直し、観光という視点で組織していくなれば、十分活用できる。肝心なのは、それをやる主体、すなわち、地域のことをよく知っている住人、観光やまちづくりに情熱をもつ市民ボランティアやNPOなどが協働するネットワークであり、それを促し組織するの

	<p>が行政の役割であろう。</p> <p>委員E</p> <p>○エリアクルーがまちの案内や歴史紹介だけにとどまらず、来訪者と地元の橋渡しとなるようなコミュニケーションの場の創造、地域的な交流の繋がりを目指すコンセプト（考え方）は興味深かった。</p> <p>○またエリアクルーは単に知識を持っているだけでなく、地元に着心のある住民を採用していることがユニーク。</p> <p>委員F</p> <p>○野田を歩き、着地型観光が成功するための条件はなにか考えてみた。</p> <p>①野田エリアのまちを愛する昔から住み続けている人々の存在。</p> <p>②その人たちの旅人を暖かく迎えようという姿勢。</p> <p>③旅人をひきつける魅力の存在・・お地蔵さん、長屋、明治・大正などの暮らしを想像させる建物、市電の石畳を使った路地などのまちなみ</p> <p>④このまちの魅力を発信したいという新住民。</p> <p>⑤まち歩き観光をまちの活性化につなげたいと考える行政</p> <p>これら①～⑤がそろっていて、コーディネーターがうまくそれらを繋げ盛り上げていくと成功するのではないかと考える。</p>
委員の意見等	<p>委員A</p> <p>○まちの魅力や特徴の洗い出しによって、観光資源と思えないものも資源になる。⇒どこでも「観光地」になる要素がある。</p> <p>○界限に多い地蔵を「開運パワースポット」と位置づけ、コース設定の際に、「のだななどこまいり伝説」（それらを複数巡らせることでご利益が得られるといういわれ）なる無形の言い伝えを組み入れることで、まち巡りに楽しさを付加している。（観光資源は既存の有形のものとは限らない。楽しめる「虚構」を新たに「作る」ことで資源たりうることも。）</p> <p>○コンテンツのベースは「歴史」とのことだが、昭和の建物でも商売でも、まちの特徴であれば十分観光資源になりうる。</p> <p>○地域（市内）にお金を落としてもらうコース設定も必要。</p>

委員B

○バージョンアップの余地があると思われた点

- ①「ななとこまいり」の意味がすぐにはわからない。パンフレットをじっくり読むなどしなければ理解できないのではなく、すぐ、それが「おもしろいもの」だとキャッチできるような工夫がほしい。
- ②「大正・昭和時代の建物（タイムスリップ）」・「路地（迷路）」・「ななとこまいり（開運パワースポット）」の3要素の総合的なアレンジ※が弱いように思われた。

※例えば「ラビリンス（迷宮）に迷い込みパワースポットを発見しよう！」というような、「冒険、それによる自己の変身実現」というわくわく感を高揚させるようなツアー設計。

- ③近年、東京の築地が外国人観光客の人気を集めている。大阪市中央卸売り市場も、人気の観光スポットにできないだろうか。

委員E

○「お地蔵さん」のように地元のコンセプトを何か一つピックアップし、これを通じて来訪者にまちの魅力に興味を持ってもらえるような仕掛けづくりは生駒市においても参考になるのでは。

視察先	宝山寺参道周辺
施策等の名称	まち歩き観光現地調査： まち歩き観光プログラム作成フィールドワーク
視察の目的	市内における観光スポットの発見を試み、まち歩き観光プログラム作成につながるか検討する。
視察の概要	1月25日、鳥居前駅13時20分発のケーブルに乗車。宝山寺駅で下車。その後、徒歩にて宝山寺に向かい、境内に入り、茶所にて折り返し参道を下る。参道に沿って、「これは何？」を探すことにした。途中、閉店した旅館を利用し営業中のアジア系の食べ物を提供するお店2軒に立ち寄り、見学。4時40分、いこまサウスモールでフィールドワークを終了した。
考察	<p>委員A 課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ○廃れて人気のない参道 ○目的地、宝山寺だけが観光の目的になり、周辺への経済効果も含めて潤いがなくなっている。(車で宝山寺に行って、参拝して帰るだけになっている。) <p>委員B</p> <ul style="list-style-type: none"> ○宝山寺参道について <ul style="list-style-type: none"> ・参道は、風俗営業旅館（玄関に「風俗営業許可店」・「十八歳未満お断り」を掲げた旅館）・非風俗営業旅館・御茶屋・個性的なお店（オーガニックなスローフードを提供するナイヤビンギという名称のカフェ&レストランなど）・民家等が並存する街並みとなっている。今後も、このような、他ではあまり見られない「混沌とした（非秩序的な）個性的な」街並みが維持されていくのがよいのだろうか。それとも、変わっていく（変えていく）のがよいのだろうか。（思えば、宝山寺そのものが、一番格式の低い仏様が一番人気という「下克上（非秩序）＝混沌」としたお寺である。） <p>委員C</p> <ul style="list-style-type: none"> ○真冬の寒い平日であり、観光客が少ないのは当然だと思うが、参道

沿いの旅館や店は閑散としており、既に営業していない所も何軒かあり、こころ痛む。民家も既に廃屋になっている家や「売却中」の札の出ているところも見られる。かつては、大阪商人の信仰と接待の場として隆盛を極めたまちの面影はすっかり無くなっている。いま、ふたたび観光地として再生をめざすためには、観光だけでなく、地域産業や、高齢者福祉なども含め、生駒のまちづくり全般の施策と併せて考える必要があるだろう。

委員D

- 地理的（交通面含め）に恵まれない環境下でも山の上から見える景色の眺めをコンセプト（売り）にしているカフェ・レストラン（例：ナイヤビンギ等）があり、野田区や練馬区のようにまち歩き観光マップのような媒体を活用することで地域の活性化に向けた検討もできるのでは。
- 参道周辺にある神社、お寺、お地蔵さんや古くから残っている建築など、野田区のように「歴史」を一つのコンセプトに来訪者に興味を持ってもらえる仕掛けづくりを行なうこともできるのでは。

委員E

- 着地型観光が成功するための条件について前日視察した野田と比較し考えてみた。
 - ・野田の場合
 - ①野田エリアのまちを愛する昔から住み続けている人々の存在。
 - ②その人たちの旅人を暖かく迎えようという姿勢。
 - ③旅人をひきつける魅力の存在・・・お地蔵さん、長屋、明治・大正などの暮らしを想像させる建物、市電の石畳を使った路地などのまちなみ
 - ④このまちの魅力を発信したいという新住民。
 - ⑤まち歩き観光をまちの活性化につなげたいと考える行政
- ⇒①～⑤がそろっていて、コーディネーターがうまくそれらを繋げ盛り上げていくと成功するのではないか？
- ・宝山寺と参道界限の場合(上記①～⑤について比較)
 - ①・・・高齢化していて、ほとんどいない？

	<p>②・・・ないのでは？新しい世代が新しい店を出すなどして、1から作る必要があるのではないか？</p> <p>③・・・宝山寺を始め、野田よりずっと豊富。</p> <p>④・・・少しおられるようだ。</p> <p>⑤・・・ほとんど行政は動いていない。</p> <p>⇒③について提案することにより、旧住民も息を吹き返し、また、宝山寺から発信したいという新住民を開拓できるのではないか？ 提案は行政と市民の協働にて行うのが望ましいと考える。生駒の他の地域においても、まずは地元の現状を知り、魅力を再発見することが大切。今回のフィールドワークで実際に歩いてみて、魅力を再発見できることを実感した。街をPRしたい、まちに来てもらいたいというマンパワーが野田に比べ決定的に欠けていると思われるが、時間をかけて丁寧に取り組めば、生駒においてもまち歩き観光プログラムが作成できると考える。</p>
委員の意見等	<p><u>委員A</u></p> <p>○「宝山寺参道賑わい再生プロジェクト」設立の必要性</p> <p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参道に店を呼び込む。(ハーブの店、摩波羅茶屋、ナイヤビンキのようなアジアンテイストの店のほかに何が必要か?) 若い人が訪れたい参道へ。 ・桜並木をどうするのか? ・生駒駅から「1丁」「2丁」の石碑、お地藏さんや明神、灯ろう、鳥居などを辿りながら参道を歩くコースづくり。(上りはきついが、参道に見るべきものがあれば、苦にならず宝山寺まで上れる。) <p>⇒生駒駅から宝山寺参道にかけての活性化。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参道わきの住宅をどう扱うか? 街並みの統一感をどう図るか。